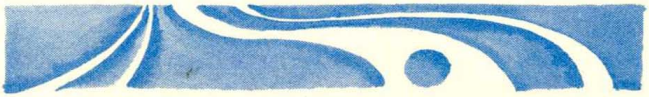
潮音短歌百人百首



伊東悦子著

短歌新聞社

潮音短歌
百人百首

伊東悦子著

短歌新聞社

著者略歴

1944年8月6日長野県伊那市美篶生。
「潮音」「白夜」幹部同人。太田五郎に師事。「十月会」「十九年の会」会員。「悠」発行同人。現代歌人協会会員。埼玉県歌人会理事。
歌集『年ごとに薔薇を』『みすずかる』『鳥ならば春の』。
歌書『月の有処』。

潮音短歌百人百首　悠叢書第4号

平成13年9月15日　発行

著者　伊東悦子

〒343-0834 埼玉県越谷市蒲生愛宕町9-17
電話 048-988-2355

発行人　石黒清介
印刷　㈱キャップス
発行所　短歌新聞社

〒166-8555 東京都杉並区高円寺南4-43-9
振替口座　00150-4-21683
電話　03(3312)9185

定価2000円(本体1905円+税)
ISBN4-8039-1065-0 C0192 ¥1905E

目

次

※

この夕べ外山をわたる秋風に椎もくぬぎも音たてにけり　太田水穂　10
秋茄子のつやをよろこぶ朝の膳箸とりそめし子もならぶなり　安田尚義　12
ひぐらしの一つが鳴けば二つ鳴きやまみな声となりて明けゆく　四賀光子　14
距離感の近き銀河をあふぎ居り身は北ぐにに住みふさふらし　小田観螢　16
水引のすいと眼に立つ裏口に繭は売られて人のものなり　山崎　等　18
ここにして心しづけし兜町立合端の木を打つ聞けば　鈴木北渓　20
ゆきひらにたきつぐ粥は粟粥の妻がこのみの雪の日のかゆ　木島冷明　22
老いぬれば愚かものなる一人にて取り入れ口の水をあらそふ　峯村国一　24
遠夫（とほづま）のさやけき声は吹く風の青竹むらにこもるとおもふ　米倉久子　26
ひさびさに髪ゆひにけりいづかたに吾はゆかまし春の日の照る　世良田優子　28
岩を削ぐ時のきざみをおもひ居り蛇をくはへて舞へる大鷹　宮崎　茂　30
水底にとほる日のかげ蓴菜のとろとろとして冬を生きをり　野沢柿葺　32
花過ぎて青葉の風の格子戸に旅商人は蚊帳をもち込む　伊藤　豊　34
枕べの瓶に花さして人去りぬ花は寒菊葉もあをあをと　増田大作　36

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

茶を点てて主客かたみにゆくこころ紅さしそめて萩のうねれる　白鳥義千代　38
わが世にはつひに逢ふべき人ならずただわびすけといふは冬の花　大井　廣　40
谷こえてあをき海より吹きあぐる嵐にさやぐ山みな若葉　関みさを　42
げんげ咲く伊那の国原風そよぎ四方の青峰に雲のゐぬなし　青山榛三郎　44
かまきりの貌三角にとがりゐて復員の子は多く語らず　林　茂人　46
呼びとめて買ひし冬菜の一たばは濡れてぞありき朝の時雨に　川添ゆき子　48
木曽殿のいくさ敗れし跡どころ春はみづ枝の若葉さしつつ　秋田青雨　50
いつとなく蜩啼かずなりてゐてときのうつりのこのしづけさは　林　道夫　52
ぬくぬくと春の日を吸ふ苔青し侘しき顔を石に見らるる　青柳　競　54
己が娘の寡婦となりし後までもながらへてわが母仕合せならぬ　若松仲子　56
電車賃ひけば残りはいくばくぞみんみん蟬をとりにゆかなん　田原美稲子　58
朝あけの光りや峯のひとつ松ひとつながらに冬支へゐる　村上昭房　60
こちらからも野火を放てばよろこびて火はわが拓地一帯に燃ゆ　野原水嶺　62
表情のうつる過程を見きはめん解剖せんとぢつと見つむる　中島貞子　64
卯の花に闇の来てゐる垣根ぞひ来るといふ人を待ちてをりたり　奥田富雄　66

お客ごつこ五つの父がもの言ひを七つの母に教はりてをり　松沢いそ江　68
雪はれてものの光りの流れたる寺の門より鵝鳥いでくる　森山謙一郎　70
太らせてつぶす兎がこりこりと赤き人参を音たてて食ふ　岡本高樹　72
返品の荷をつみ上げて疲れ居り店主の友に眼で物を言ふ　山本雄一　74
踏みこえて人のむくろを石くれのごとくもしつれ今思ひみる　栗原俊夫　76
富める者身内に一人なきことも親しとおもふふるさとに来て　二木好晴　78
一ところ蒼空ありて降るしぐれ稲刈りすめば野は意欲なき　原田　信　80
羽毛など片寄せてゐて産むときの表情を知れば卵ををしむ　太田五郎　82
大会にあふれて人の渦めぐる誰にも会へて誰にも会へず　水上正直　84
わが夫は菩薩の愛をよろこばね女の愛をわれにもとむる　渡辺信子　86
一本のポプラが丘に立ちてゐて悲しみは垂直に空より来たる　宮原茂一　88
黒き一羽孤独に慣れし脚強し鶏なれば卵を産みてをはらむ　井戸川美和子　90
卓上に塩の壺まろく照りゐたりわが手は憩ふ塩のかたはら　葛原妙子　92
縫ひいそぐ畳針にきずつく指なめるくちびるぴりぴりかわく木枯　上島ゆかり　94
年の瀬の障子張りをり幾人の子を生すとても老いては独り　大川きよ子　96

流麗にもの言ふ術を知らぬ身は花ある室に暫し黙しぬ　沼波美代子　98
みんなみへ潮萬里を翔けゆかん燕ふたつ海を見てゐる　山田吉春　100
思はぬに路をよぎれる藪雉子曳く尾のひかりやがてかくれし　本木通房　102
法然坊親鸞道元も苦しみし世にして君に歌ありしこと　太田青丘　104
うたがはず眠るか髑髏の眼孔に海の小蟹はいでてかくるる　四本堯政　106
嵐の中にすつくと立てり受けつぎし我が家の血筋波乱を好む　森　満江　108
こほろぎよ敗れし国のこの土の草が吸ひあぐる露のみて鳴け　土屋克夫　110
たづねくるひとも稀なる二月（きさらぎ）の曇りに咲きて侘助といふ　幸田幸太郎　112
すりへりし下駄おもはゆく登りゆくこの階（きだはし）やロダンに続く　倉地与年子　114
ひたぶるに食うべ眠りて山の蚕ははや死ぬみどり透きとほりたり　小島縫子　116
すみきりて水の近江の空青しかなしみゆゑに生きたかりけり　三品千鶴　118
らんまんの花はまぼろし寒梢をつらぬく鶯の一声にあふ　坂田信雄　120
障子しめて寝にゆく媼その障子あけて明日また起きて来ませよ　清野房太　122
※
麻薬にたよるしばしの夢を犯し来て亡き母もすでに優しからざり　太田満喜子　124

山ありき山を覆へる空ありきこの嘱目に涙ながるる　古河恒雄　126
履歴書は坑夫の子なり支柱夫と書く指先のふるふすべなさ　田中賢介　128
声挙げぬ慟哭ののちわれの手は唯無意識に葱きざみ居り　寺田栄子　130
水かがみ死のしづけさに澄み入りてひそかにひと日われをうかがふ　中村七郎　132
めぐり幾重にもあらぬ小さき島に来て眠る時海は胸元の高さ　太田絢子　134
谷向うの誰かは見んかわが点けしひとつも秋のともしびとして　翁たつ子　136
虔しく明日を信じる瞳を思ふ藁燃やし藁燃やし母の冬支度　加藤寿美子　138
赤不動うちに抱けり究極のわれを支へしは瞋りならずや　田辺恵美子　140
六十年われに昭和は何なりし飾るに由なし金貨も切手も　中田武夫　142
日の出づる月の満ちかけ見ゆる窓ここに私の祭壇を置く　植松節子　144
悔多く生きて悔なし花八手昼の花火となりて爆ぜ咲く　槙野武子　146
ゴーストップ歩幅大きく近づきて待ちゐし人の視線抱きとる　蛯名五郎　148
死なれまたしなれてある日をはらなむれんげ蜜少し壺にのこして　中沢俊子　150
夫も子もありと血しぶく嘘つきてこの旅人の憐愍をくだく　山本治子　152
水門はみなひらかれて田植待つ一村水の匂ひのなかに　富山繁子　154

をさな名で互みに呼ばふをみならの美濃に生まれて遠くは嫁かず　黒岩百合子　156
親指の腹さりさりと研ぎ上げし大草刈の刃先たしかむ　保科郁夫　158
倖せを疑はざりし妻の日よこんにやくふるふを湯の中に煮て　中城ふみ子　160
見返れば来し方遠き高原か人の声するかたへ帰らむ　園田節子　162
もののひかりしづかにありと頭をあげて見し記憶さへねむりのうちか　坂田二三夫　164
指先に何はばからず吾がものとなりたる今日の銭を数ふる　上釜守善　166
その山の稚き咽喉ゆ溢れくるうたとも春の水かがやけり　波汐國芳　168
世間などどうでもいいや首上げて直立してゐる王様ペンギン　山名康郎　170
六千度の熱おもひみよ一瞬に石に焼けたるにんげんの肉　苔口萬寿子　172

※

黄水仙の花剪る母を呼ばへども母はかげろふの向うより来ず　豊田和子　174
ひといろに枯れし蟷螂ひそみゐて光うせたるひとみをひらく　石橋妙子　176
眠る間も眉間にくらき皺をおくこのかなしみをしばし見つむる　岸田文子　178
草市にまぎれきたるはなにゆえの痛みと問うな火に伏したきを　藤田　武　180
死ぬまでを敗者復活の闘ひに過ぎむかわれの昭和一桁　船越忠雄　182

浮かびたる地球の清き影あるとかそけきかそけきその楕円はも　高崎亘代　184
遂げしとて減るかなしみの量ならず遂げてをはりの恋にあらねば　大塚陽子　186
逆光に弧を画く裸木雪原の吾に一分の打算はなきや　鎌田みち子　188
信濃ではうだつ上がらぬと言いきりて結局酒を飲み直しする　疋田和男　190
向かうの道を走つていつた半生も葱畑にほふあらしのやうな　高橋正子　192
黄の絵具使ひ果たして少年はもどりゆきたり向日葵のみち　横井ユリ子　194
梢高く蟬は鳴けるをあやまちて人に生まれしものは聴きゐる　林　市江　196
籠をなすわが胸廓にこともなくけふしづかなるはやぶさ一羽　梅田靖夫　198
ちちははに背きし若き日の力もちて今われ子を宥すなり　穴澤芳江　200
杳き日の障子閉されし奥座敷わが紙風船は静止せしまま　高嶋あき　202
かき昏む雪のなかよりあらはれて基督の足つねに宙づり　今川美幸　204
生き残る文鳥のためあたたかき陽は少しずつ部屋にさしこむ　純多摩良樹　206
湖沼学まなばぬわれもこの湖のアクセント無きものいひを知る　茅　亮子　208
あとがき　211

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

潮音短歌百人百首

この夕べ外山をわたる秋風に椎もくぬぎも音たてにけり　　太田　水穂

「外山」は、人里に近い山。ひっそりとした闇の中で、風が椎や櫟の実を屋根に落としてたてる小さな音を聞いている作者である。初句わざわざ「この」としたのは、たまたま旅に出てこの山村の一家に宿ることになった「夕」であろう。しんとした真っ暗闇の中で、多分初めは何の音だろうと訝しく思ったに違いないが、ああ、木の実の落ちる音か、と分かってみると子どもの時分を思い出すような嬉しく懐かしい気分になって、じっと聞き入っているのだろう。外山を越えて吹いて来る風から詠いおこして、「椎も櫟も」と具体的に並べ、結句かすかな音一つに収斂させて行く手法は充分に意図的なものでありながら、実にのびやかな調べと深い寂寥感をただよわせる格調高い一首となっており、豊かな精神世界を持った確かな一人格を思わしめよう。信濃生まれの水穂の本質はこんな静謐典雅、ともいうべき自然詠にあったのではないかとも思う。

・われ行けばわれに随き来る瀬の音の寂しき山をひとり越えゆく
・花ぐもりいささか風のある日なり昼野火もゆる高遠の山
・曇る日の枯野をまへに一軒の家の障子はとざされてあり
・戸をあけて柳に風もなき日なりみじろぎたまへ雛のきみたち
・こほろぎはこのあたりにて啼くならむひるみればこともなき庭の石

太田水穂は本名貞一。明治九年十二月、信州広丘村生まれ。兄二人姉三人の末っ子。高等小学校担任教諭の影響で和歌や詩を雑誌に投稿するようになったと言う。一首目も自然の中で。峠の細い上り道、あまり大きくない流れの音はずっと下の方から聞こえてくるのだろう。生き生きとした的確な上句と青年期らしい甘い寂寥感の下句の照応絶妙。二首目は白秋とともに南信地方へ講演旅行に出掛けた折の作。高遠はいまも桜の名所、地名が効いている。三首目、蕪村の画にでもありそうな。枯野を前にした閉ざされた障子、は、実景でもあり、象徴の景でもある。四首目も絵画的。雛のきみ達への呼び掛けが艶。王朝風の雅やかさも水穂ならでは。五首目は、正体見たり、の、こともなき庭石なのだが、その、こともないものを趣き深く感じる所詮自分達歌詠みを面白がっているのではないかと思う。

昭和三十年一月一日の水穂逝去にあたり、四賀光子は「門弟の一人として」として、〈先生は、記紀万葉以来、古今新古今、俳諧と進歩発展して来た日本の国民詩和歌の大道を研究して、近代流入し来つた西欧思想文学の影響裡に新しき短歌の進路を開かんことを意図された。しかし歌壇の無批判なる現実実証主義傾倒に対して、勢ひ主観主義を持してその主張を押し通されたので、一時は歌壇の傍流の如く見なされてゐたこともあつたが、先生は常に毅然としてその所信を告げわが直感象徴の道こそ伝統の本流を受け継ぐものであると云つて後進を鞭撻された〉云々と書いている。散文の見事さ、弁舌の流暢さも大きな魅力だったという。

秋茄子のつやをよろこぶ朝の膳箸とりそめし子もならぶなり　　安田　尚義

なんとなく自然に、一時代前の、良き家族揃っての朝食の場面が浮かんでくるような一首。何が一時代前、と感じられるのかというと、まず取り立ての秋茄子の艶を喜ぶことの出来る感性であり、かつ、箸を持ち始めたばかりの幼児も含めて、何人もの家族がきちんと朝ご飯の席に並んでいる暮らしぶりであり、その座の中心として一同の幸せを見守るごとく家長の座にいる作者の有り様であろうか。言い換えれば、そのどれもが、昨今の日本社会からめっきり喪われてしまっているのではないかと思えてならないからである。その弊害多々はともかくとして、秋になって一層うまみの増した茄子は、中華風だ西洋風だと珍しい料理をしたわけではあるまい。生のまま細かい線切りにして鰹節を掛けるか、皮に切れ目を入れて油焼きするか、昔ながらの調理法は、自然の艶を喜ぶ心にふさわしい。作者の、どっしりとした存在感と、暖かく優しい性格が伝わってくるようだ。

・田に笑みて手拭とるは誰が娘ぞもかへりきたれるふるさとの道
・午前二時しんかんとわが影坊の死にゆく母のうへに落ちたり
・台風のなごりからりと今朝晴れて真白き靴を石に乾かす
・小作人自作となれるよろこびにあぢさゐ色の誘蛾灯をともす

・りんとして紅梅ひらく下に立ち九十寿の計を立てむか

安田尚義は明治十七年四月宮崎県生まれ。同県出身若山牧水とは早大時代より交流があり、まず「創作」に参加したが、鹿児島一中での教え子山下秀之助、伊勢静夫、林道夫等が潮音同人であったこと、夫人が四賀光子と同級の親しい友人であったこと等の縁で、大正十年直接水穂を訪ね面談、水穂の歌論の精神性に牽かれ、翌年「潮音」に入社した。早大卒業後、教職に就き、北海道函館へ渡るが、病を得て帰郷。教職に在りつつ、地理歴史学者としての研究や地方文化財保護にも貢献した。大正十三年、水穂の来訪を機として鹿児島潮音社友を中心とした歌誌「山茶花」を創刊、主宰。現在に続く多くの後進の育成に努めた功績はきわめて大きく、潮音初期、北海道の小田、信州の峯村と共に重きをなした一人。生家は代々の絵師であったという。五十一歳の折妻を亡くしたが、のち再婚。つねに人間や自然に向ける暖かなしみじみした情が、作品を瑞々しく匂いやかなものにしている。潮音六十年記念号歌人論では、桑原一が「清高にして豊饒の歌人」と題して、安田短歌に横溢する〈気位の高さ〉を指摘、それが自らのことを誇るのではなく、自分にも周囲の者達にも「清廉高潔にあらまほし」という訴え掛けであり、「統率者主宰者としての資質」を持っていた証としている。かの浜田到も若い頃、この門にあったという。居邸入口にあった二本の槙大樹により「双槙居大人」と称する。昭和五十年二月、九十九歳で没。歌集『群落』『尾鈴嶺』。歌文集『虔々集』、随筆集『森の男』等多数。『安田尚義著作選集』もある。

ひぐらしの一つが鳴けば二つ鳴きやまみな声となりて明けゆく　　四賀　光子

この作品が収められている『麻ぎぬ』は光子の第三歌集。刊行は戦後であるが内容的には昭和十三年から十九年末まで、あとがきによれば「支那事変から大東亜戦争まで」の作品が収められている。掲出歌は昭和十五年作、その前年に水穂とともに移り住んだ鎌倉扇谷の家での実体験にもとづいている。遠く湘南の海を見下ろし、周囲を鬱蒼とした木立に囲まれた山荘の夏の早暁、短い生の刻々を惜しむように啼き始める一つ蜩の声、誘われるように二つが啼き三つが啼き、そしてたちまち山全体が蜩の声に包まれて行く。長く東京市中に住んでいた光子にとっては新鮮な感動だったのだろう。二句から三句、四句へと畳み込むように言葉を重ねて行く手法が見事であるが、この作品におけるキイワードは結句「明けゆく」であると思う。この結句に至って、読者は、蜩の声の満ち満ちた地上の感動から、その声を包み込むような大空の静けさへ、さらにはその向こうの時空を超えた遠く深い世界へ向けられた作者の思いに誘われて行くような。この歌の良さについては光子自身が随筆集『行く心帰る心』の中で、水穂がつねに「よい歌には二つの方向がある。一つは一点から無限に拡がる「拡大」、二つには無限から一点に集まる「集約」の手法である」と言っていたとして、この作が、その「拡大」の手法をもっているせいか、と解いている。眼で読んで良く、声に出して読んで良く、多くの人々に愛唱されている光子代表歌の一つ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com